



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

錦上 KINJO TENKA 添花

ここは館長の部屋
グランドオープンに向けて

早いものでグランドオープンまで残すところ3ヶ月余りとなりました。再スタートに向けた準備もいよいよ佳境を迎えている。

さて、読者の皆様の中には、御記憶の方々もおられると思われるが、前号ともにお届けした「現代龍馬学会」会報誌の「こぼれ話」に掲載されていた「田中伯爵の白い花」(京都国立博物館の宮川禎一氏)の「後日談」である。

白い花というのは、南米原産のハナニラ(花韭)のことで、明治になってから観賞用に輸入されて全国に広まったようである。一方、田中伯爵は、龍馬とともに土佐勤王党に参加し、中岡慎太郎亡き後の「陸援隊」副隊長として活躍した田中光顕であり、明治新政府では宮内大臣も務めた人物である。

また田中は、龍馬ブームの発端の一つにも関わっている。明治37年の日露戦争開戦を前に、昭憲皇太后の夢枕に一人の男が立ち、「身は亡き数に入り候へども魂魄は御国の軍艦に宿りて忠勇義烈なる我軍人を保護仕らん覚悟にて候」と伝えたそうである。皇太后がその男について側近に尋ねた際に、龍馬ではないかと思つた田中が写真をお見せしたところ、龍馬であることが判つ

たという逸話がある。そして、そのことが新聞報道されて以降、龍馬は日本海軍の守護神とされるようになったと言われている。

宮川氏によれば、京都国立博物館のお隣にお住まいの方からの話として、昭和10年頃に、その方のお父様が静岡県にあった田中伯爵の邸宅青山荘の庭にあったハナニラを頂いて京都に持ち帰り、移植したところ、その後世代を重ねながら絶えることなく、いまなお、その場所です毎年咲き続けていると

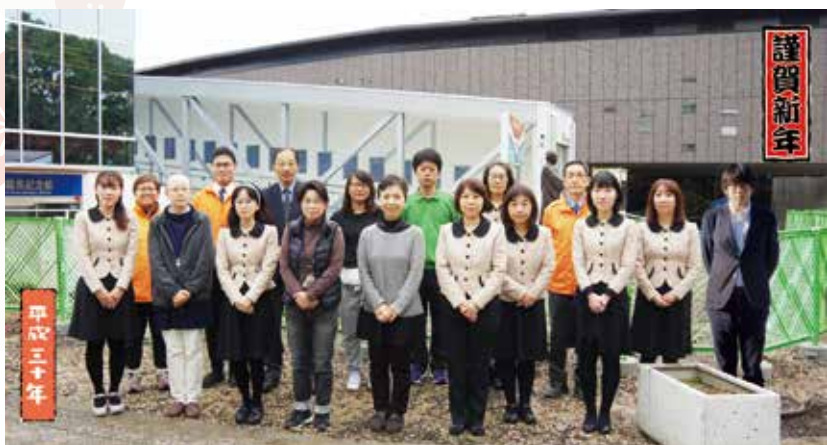
のことであった。昨秋のある日のこと、宮川氏から「件のハナニラの球根を送るので、記念館の何処かに植えてみては?」との御連絡をいただいた。

「も」もなく、喜んでお引き受けし、自宅のベランダのプランターに球根を植えたんだのは10月のことであつたが、1週間も経たないうちに芽吹き、今、緑鮮やかな葉がすくすくと育つてきている。

80年以上前から京都で咲き続けてきたこの花が、桂浜の台地に移されて、記念館を訪れる人たちの目を、これから何年にわたって楽しませてくれる

だろうか。ハナニラは、3月26日の誕生花とされている。記念館のグランドオープンまで残すところ26日に当たる日である。

今号の四文字熟語は、「錦上添花」とした。佳きこと、めでたいことが重なるという意味である。我が家で育ちつつあるハナニラが、文字どおり記念館の再スタートに可憐な花を添えてくれるようにと願う今日この頃である。



●当館ホームページより『飛騰』PDF版をご覧ください。→<https://ryoma-kinenkan.jp>

坂本龍馬記念館 -新館と本館-



新館の階がみえてきました。(2017年3月9日) 少し工事が進みました。(2017年2月7日)



新館がほぼ完成しました。(2017年9月6日)



まだ、ほとんど更地です。(2016年12月7日)



新館と本館をつなぐ連絡通路の形が見え始めました。(2017年10月11日)



新館は蔵をイメージした建物です。(2017年12月5日)



新館に館名を設置しています。いよいよ！です。(2017年12月5日)



新館と本館は渡り廊下でつながります。(2017年12月2日)



本館の出口近くには、ミュージアムショップができます。本館「幕末広場」は現在工事中。手前の広い空間に「近江屋」が再現されます。(2017年12月5日)




新館2階常設展示室。大きなガラスケースの中にこれから資料が並びます。(2017年12月5日)



飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！

視聴方法は簡単！

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し  マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。

※本コンテンツは2018年3月31日まで閲覧可能です。





温かみ感じる、木の受付カウンター。(2017年10月1日)



新館にはホールもできました。(2017年10月1日)



看板もたちました。
(2017年12月14日)

周りの道の整備もすすみます。
グランドオープンまで、あとわずかです!
(2017年12月14日)

着工から記念館の「今」まで

高知県立坂本龍馬記念館は、龍馬生誕150年に当たる1985年、龍馬生誕150年記念事業実行委員会による「坂本龍馬記念館構想」が起り、募金活動が始まり、1991年11月15日の龍馬の誕生日(そして命日)に「高知県立坂本龍馬記念館」が開館しました。

それから年月が流れ、当館は「龍馬への入り口」「龍馬の殿堂」として、県内外の多くの方に親しまれています。真筆の龍馬の手紙をはじめ、「土佐藩邸史料」など貴重な資料を所蔵し、展覧会や多彩なイベントで、坂本龍馬の魅力を発信してきました。一方で、資料の保存や展示には、適切な環境整備が急務となっており、本格的な博物館機能を備えた施設の必要性が高まっていたのです。そうした動きから、2016年12月に「坂本龍馬記念館リニューアル基本構想検討委員会」が発足し、翌年7月に基本構想が決まり、そして2016年10月に新館の起工式が行われたのです。2017年4月1日から1年間休館し、新館建築と既存館(今後は「本館」という名称)の内容のリニューアル工事を行ってまいりました。

新館は、重要文化財など貴重な資料を保存、展示するために必要な機能(温湿度管理、塩害対策、防塵、遮光、防火機能等)を完備した収蔵庫、展示室を備えた施設として新しく開館します。展示室は従来の展示スペースよりも広くなります。2017年末の時点で新館の建築工事が終わり、内装作業の真つ最中です。展示室も現在展示準備中であり、残念ながら今は何も資料は並んでいない空っぽの状態です。年明け後には本格的に展示作業も始まり、オープン後は「龍馬の生涯」を系統的にご覧いただけます。大胆にリニューアルする本館も現在鋭意工事中。こちらには、映像やイラストを多用した、わかりやすい展示や体験型展示などの楽しいコンテンツが並びますが、新館同様、現在工事中のため何もない状態です。どのようなコンテンツを体験できるのか、どうぞお楽しみに。

本格的な博物館「新館」と楽しく龍馬や幕末に親しむ「本館」の2館体制となつて、4月21日に新たなスタートを切る高知県立坂本龍馬記念館の今後の活動にご期待ください。
河村 章代

県外巡回展リポート(下)

「土佐から来たぜよー坂本龍馬展」は、昨年1月から9月まで岡山を皮切りに熊本、東京、広島と4会場で開催し、各地盛会裏に終りました。リポート最終回は、巡回展千秋案にふさわしいふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館)での様子を、入館者の声「拜啓龍馬殿」ともにご紹介いたします。

龍馬資料を一挙公開 「龍馬のすべてが目の前に」 7月14日～9月10日 ふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館)

広い会場いっぱい龍馬資料が並んだ。担当者が苦心工夫された『龍馬展図録』とリンクするような幕末ストーリーの展開は、まさに圧巻であった。巡回展中、最も多い121点の当館龍馬資料に加え、ペリー肖像画(ハイネ画 1856年)をはじめとする博物館所蔵の幕末資料群が見る人を引き込んだ。

特に福山と龍馬をつなぐ「いろは丸事件」や、龍馬が広島県尾道市出身の林謙三(海軍大尉・安保清康、慶応3年11月)らに宛てた龍馬書簡コーナーは、海援隊長就任後、大政奉還から暗殺に向かう龍馬の時代を急ぐ姿が鮮明に感じられた。真つ先に巡回展開催の決まった同館は、3年の歳



博物館前の龍馬のノボリはJR福山駅から皆を出迎えた



会場入り口の龍馬と一緒に撮影する家族連れ

月をかけて中国新聞社や福山市との連携にも力を入れ、地域への呼びかけを行って来られた。JR福山駅に隣接する会場近くには駅構内からポスター、パネル、のぼりetc. あらゆるところに龍馬がいた。教育普及として小中高校への来場呼びかけ、高校生とともに龍馬の手紙を読む朗読コンサート開催、お茶会、講演会等週末ごとの催しも活発だった。

私も講演会と解説の講師として会期中5回参加させていただいたが、会場には毎回大勢の人があふれた。広島県は、坂本龍馬記念館入館者数の中でいつも上位に入る県である。その広島の人々の龍馬への思いを実感することができたように思う。龍馬の時代を感じさせる鞆の浦の港を南にして、備後の国として中国地方に存在感を示してきた同地で、巡回展を終了させることができたことに感慨一入であった。

記念館開館以来初めての県外巡回展の終了は、遠く長い旅を終えたような気持ちでした。ご来場者をはじめ関係の皆様により感謝と御礼を申し上げます。
前田 由紀枝

拜啓 龍馬殿



「平成の龍馬」
私は平成の龍馬(鞍龍馬)福山県立博物館にやってきました。真殿に逢いたくて、やっと逢えました。嬉しかったです。鞆の浦は龍馬ゆかりの地でボランティア頑張っています。龍馬がどんなに素晴らしいか、全国の皆様にお話しています。これからも見守ってください。

「楽しかった」
龍馬の数々の手紙にくわしく注釈がなされていて、とても読むのが楽しかったです。ありがとうございます。

「リょうちゃん」
30年もの頃ですが、私が塾に勤めていたときに若い教師が私に興奮気味に語ったことがあり、今でもよく覚えています。僕は坂本龍馬が大好きで、本は何回も読んでいます。僕の子どもが最近生まれたので子どもに「りょうちゃん」と名付けました。また不思議なことに子どもの背中に面の黒い毛が生えているのです。それも龍馬が生まれるときと同じでした。彼はこんな風に龍馬が大好きなことを言いました。あれから30年もたちます。りょうちゃんはどうな女子に育っているかなあ!

「教科書で知った」
貴方様のごことは小学校の時から教科書で知りそれからずっと勉強しておりました。奥様のお龍様とは3年間しか生活できなかったと知った時は衝撃でした。同じ女として寂しく悲しい気持ちになりました。ですが貴方様のおかげでできた事は正しく清い事だと信じている方々は大々立ち直ります。お龍様も直ぐ立ち直られます。これからはもっと一人のファンとして追いつけますのでう

「拍手!」
志なかばでこそ御無念だったとお察し致します。あなた様の「思い立ったら即行動!」見習いたいと思います。短かったけど、とても甲斐のある充実した日々を送られましたね。こちらも見習いたいと思います。かつよくステキな人生に拍手です!

「家族で龍馬ファン」
土佐に家族で旅行に行つて以来、家族で龍馬様の大ファンです。たくさんのお話を聞かせていただいています。皆さんの事を学ばせていただいています。日本を洗たくしてくださってありがとうございます。また来年家族で桂浜へ行くつもりです。

「温故知新」
江戸時代の激動の中、私心のかけがなく働かれたこと大変に尊敬し、行動をするという勇気をみないたいと思います。龍馬さんをはじめ、志を持った方々が日本に動きをかけてくださったことにより今こうして生きていることができています。かと思ひます。古きを温めて新しきを生きて」という気持ちで、龍馬さんたちが生きてきた時代の出来事、もう一度しっかり知っていきたく思います。最後まで志を持って行動した坂本龍馬という人が私は大好きです。

「ワクワクドキドキ」
私は坂本龍馬ファン歴20年のベテランですが、龍馬の事を考えるだけで何かワクワク、ドキドキを感じることがあります。(中略)刀の時代にピストルを撃ち、さらには万国公法を用いて日本国で初めての海難事故を処理した力量は私だけでなく、今の人

「台湾から」
拙者は台湾から参った、龍馬殿も任じたことがある京都で留学しています。この度、龍馬殿の大ファンとして、大河ドラマ「龍馬伝」を見てゲーム「龍が如く 維新」を致した上で、今回の企画展を見学し、誠に感動しております。龍馬殿の故郷の土佐も訪問したいと思っております。ありがとうございます。

「りょうまさんへ」
りょうまさんがみたせいかいはどうですか。りょうまさんがこんどきたら、おしえてください。ふくやまものうらはきれいでしよう。おりょうさんとあそびにいきます。せとおもひとこそくどうがあるのせうとおもひです。りょうまさんはのりりますか。

「広島県尾道市」
拙者は尾道市出身の龍馬ファンです。龍馬殿の故郷の尾道市に参りました。龍馬殿の故郷の尾道市に参りました。龍馬殿の故郷の尾道市に参りました。

2017年県外巡回展 会場の声 広島 (7/14~9/10) 「龍馬ゆかりの地にて」

*** 編集者より ***

今回は広島県立歴史博物館でお寄せいただいたメッセージをご紹介します。昨年は龍馬没後150年ということもあり、各地で様々なイベントがおこなわれました。再び龍馬への注目が高まり、新たな龍馬ファンも増えた一年だったと思います。今年は明治維新150年、龍馬記念館のグランドオープンもあります。より多くの皆様に龍馬の魅力をお伝えできるよう職員が一丸となって開館準備に取り組んでまいります。
尾崎 由紀

浦戸城天守と石垣



士佐史談会会長
現代龍馬学会理事
宅間 一之

浦戸城の天守、それは五間四面の三層で本丸の最も高い部分にあった。入母屋の屋根には本瓦が葺かれ、千鳥破風も構えられ、最上層には高欄も縁もつけられ「教奇を凝らした」ものと土佐美術研究家の山本淳氏は、『土佐美術史』に記している。

いまの駐車場は詰の段、そこより7m高い天守台、海拔59.1mの上に威風堂々と聳えるものであつたらう。その天守は高知城の丑寅の櫓として山内氏に持つていかれ、天守台も昭和33年の展望台建設のため北斜面が削られ不正方台形となった。周囲は樹木に覆われているが、古図には「五間四方」と記録され、頂上には東西11m、南北15mの平場が、また斜面には石垣の石を思わす石材の露出もそのままである。見上げる天守台、ふと現存の三重天守を残す弘前や丸亀の城に思いがはせる。

平成5年、旧国民宿舎改築の調査によって石垣が発見された。築山の西壁に北壁、そして東壁から、石の間に小詰め石を隙間なく詰め、少し勾配をもたせた野面の石



垣。さらに壮観であつたのは東側出丸東斜面の石垣であつた。上方はかく乱され失われていたが、基礎部分が南北にはほぼ90m続いたものであつた。その景観は浦戸城が中世山城から近世城郭への変化の事実を人々に知らせ、戦国時代から近世への激動期の社会的背景をそのまま投影したものであることも教えた。平成6年3月には天守台と保存された石垣は高知市史跡に指定され、土佐における浦戸城跡の位置づけと、歴史的復元による歴史の風景再現に大きな期待が寄せられた。

昭和2年山本淳氏は「浦戸の天守閣は高知城の三の丸の丑寅櫓として建ててあつて高欄つきの教奇を凝らした点より考えると浦戸城は宏荘偉麗なる城廓であつたことが豫想せらるる然るに今やその城趾は寒烟野草に閉ざされて見る影もないのは洵に感慨に堪えない。」と書き残した。いま、また大きく姿を変えた浦戸城跡。今日もつめたい海風が天守台の木々を揺すりながら通り過ぎていく。

天忠組の心を全国へ

天忠組シンポジウム in 東京



奈良県東吉野村
阪本 基義

東吉野村
エッセイ⑫



プログラム

幕末の文久3年8月17日、孝明天皇大和行幸の御先鋒を自任する尊王攘夷派の志士たちが、大和五條の代官所を襲撃、代官以下5名を殺害して代官所を焼払い近くの寺を本陣として「五條御政府」を称えた。しかし、京都における「八・一八の政変」により天皇の行幸は中止、尊攘派の公家や長州勢が京都から一掃された。これにより天忠組は一転朝敵を蒙り吉野山地を追討軍に追われ、東吉野村で事実上壊滅した。この事件は「天忠組の変」と呼ばれて、吉村虎太郎、那須信吾、安岡嘉助ら土佐脱藩の志士18人も加わっている。

平成25年、天忠組150年を機会に奈良県内の五條市・安堵町・十津川村・東吉野村の四市町村が連携協議会を結成、天忠組を全国に知ってもらおうと、官民一体になって「天忠組シンポジウム in 東京」を開催してきた。

第5回は、昨年10月13日、有楽町 のよみうりホールで700人もの参加を得て開催された。



パネルディスカッション

加を得て開催された。今回のテーマは「奥大和に咲いた維新の桜」志に散った天忠組。奈良県立大学客員教授・岡本彰夫さん(元春日大社権宮司)の基調講演「利他・責任・再生」をはじめ、映像作家・保山耕一さんの半年にわたる口ケ作品「天忠組桜紀行」が上映され感動

を呼んだ。吉野山風に乱る、もみぢ葉は我が打つ太刀の血煙と見よ(吉村虎太郎)

君がため身まかりにきと世の人に語りつぎてよ峰の松風(松本奎堂)さらに、6人のパネラーが志士たちの辞世を切り口に天忠組志士の心情、現代を生きる私たちが学ぶべきことについて討論した。

「一心公平無私」の旗のもと志なかばで斃れた天忠組。15人の志士が東吉野村で眠る。今年是天忠組155年。東吉野村に住まう一人として次代を担う子どもたちにも天忠組の「志や心」を伝えていきたい。

※平成27(2015)年1月から始まった「東吉野村エッセイ」は、前職と現職の奈良県東吉野村教育長のお二人に、吉村虎太郎が幕末から現在までをリレーで話題提供していただきました。今回、丸3年を機に終了いたします。ありがとうございました。

終生酒と旅を愛した文人

「大町桂月記念碑」

桂浜の浜辺遊歩道を龍頭岬に向かう途中、海を眺めるようにして「大町桂月記念碑」が建っている。この記念碑は昭和4年（1939）、大町桂月先生記念碑建設会により建立されたもので、側面に和歌背面に碑文が刻まれている。

「みよや見よみな月のみのかつら浜 海のおもよりいづる月かげ」

大正7年、38年ぶりに故郷の土を踏んだ桂月が愛弟子・田中桃葉と桂浜に遊んだ折りの和歌である。11歳の時に高知を離れ、久しぶりに見た高知の美しい景色。桂月はどんな思いを抱いたのだろう。背面の碑文には建立した有志57人の思いが刻まれており、桂月への熱い思いが伝わってくる内容である。

大町桂月（1869～1925）は高知市出身の文人。名

は芳衛。雅号桂月は月の名所桂浜に因み、「桂浜月下漁郎」を縮めたもの。桂月の文業は美文・韻文・隨筆・紀行・評論・史伝・人生訓など多彩、著書200余冊。文章は平明自由で、一世を風靡した。終生酒と旅を愛し、酒仙とも山水開眼の士



とも称される。仙味を帯びた飄逸酒脱の人格はその文章に色濃く映写されている。（潮江・桂浜地区ガイドブックより）

大町桂月は全国を旅して紀行文を残しているが、北海道に大正10年、11年と続けて訪れており、蝦夷地開拓を目指した坂本龍馬とも少し通じるものを感じる。

また、北海道中央部、大雪山北麓石狩川上流部にある有名な「層雲峡」は、桂月が命名したものであり、かつては、アイヌ語「ソ・ウン・ベツ」（滝のある川）と呼んでいたそう。桂月が、大正10年（1921）「層雲峡」の字を当てて紹介したものである。

龍馬があので世で桂月と出会ってれば、酒を酌み交わし、話に花を咲かせているのではないかと、一人妄想し文章を書くパソコンの前で笑みを浮かべてしまった。

渡辺 曜子
西本 有里

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！

視聴方法は簡単！



- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2018年3月31日まで閲覧可能です。

グランドオープンに期待する③

第3回は、NHK高知放送局キャスターの和田知子さん、地元浦戸竜宮祭実行委員の山本和代さん、そして当記念館カルチャーサポーターの小松ゆきえさん、女性3名の期待の声を届けます。

「龍馬が作った つながり」



NHK高知放送局キャスター 和田 知子さん

「祝リニューアール オープン」



高知市浦戸地区竜宮祭実行委員 山本 和代さん

「実物を見る」



坂本龍馬記念館カルチャーサポーター 小松 ゆきえさん

今後の研究、展示、イベントが楽しみです。（談）

取材を通して日々多くの人と出会う私にとって、人との交流を大切にしたい龍馬はお手本です。薩長同盟や大政奉還が成し遂げられたのは、龍馬の幅広い人とのネットワークがあったからだと感じるからです。この龍馬が作ったつながりが、新しい記念館を拠点にして現代にも広がっていくことを期待しています。（談）

待望のオープンをお祝い申し上げます。昨年1月、龍馬暗殺5日前に書かれた手紙が発見されたとの報道後、高知でも高知城歴史博物館などで展示されました。その中に「新国家」という言葉があり、龍馬の思想の先進性を確認しました。現代、特に政治的課題に直面する時、龍馬の意見を聞きたいと思うのが常にあります。

中村 昌代

職員紹介

「グランドオープンに向けて頑張ります」



11月より坂本龍馬記念館に勤務することになりました。

中西 洸太郎と申します。私は今年の9月まで7年半県外で暮らしていました。今回地元である高知県に帰ってきて、高知の魅力を伝える仕事がしたいと考えていました。高知の象徴とも言える坂本龍馬を伝えていくことに尽力したいと思います。

中西 洸太郎

龍馬の手紙を読む —くずし字を活字にすること—

高山 嘉明

当館が所蔵する龍馬の手紙を集成した『龍馬書簡集』という本がある。これは、龍馬の手紙の全文を翻刻（活字になおすこと）し、それを現代語に訳するという、当館の企画になる本である。現在、その改訂版の編集作業が続いている。龍馬の生の声を現代語に訳することの苦勞は容易に想像していただけたと思うが、それとは別に、龍馬が書いた文章を現行の活字に改める作業も、同じくらい我々を悩ませる。今回は、その苦勞について若干記しておきたい。

漢字なのか仮名なのか

現代社会で使われる日本語の文字は、基本的に漢字と仮名（ひらがな・カタカナ）のみである。ところが、江戸時代の人々は、漢字と仮名の中間体のような文字を頻繁に用いる。一般的に変体仮名といわれるのがそれで、文字通り漢字が崩れて体を変えたような字形をしている。一方、「くずし字」といわれるように、漢字も楷書で書かれることはほとんどなく、その原形をとどめない。ここで問題となるのが、崩して書かれた漢字と、変体仮名とが、どれほど異なる形をしているのかということである。結論をいえば、これらに大きな違いはなく、ほとんど同形となることしばしばある。ある文字について、それが漢字なのか仮名なのか、その字単体で正解を出すことは難し

い。したがって、その判断材料としては文脈しかない。

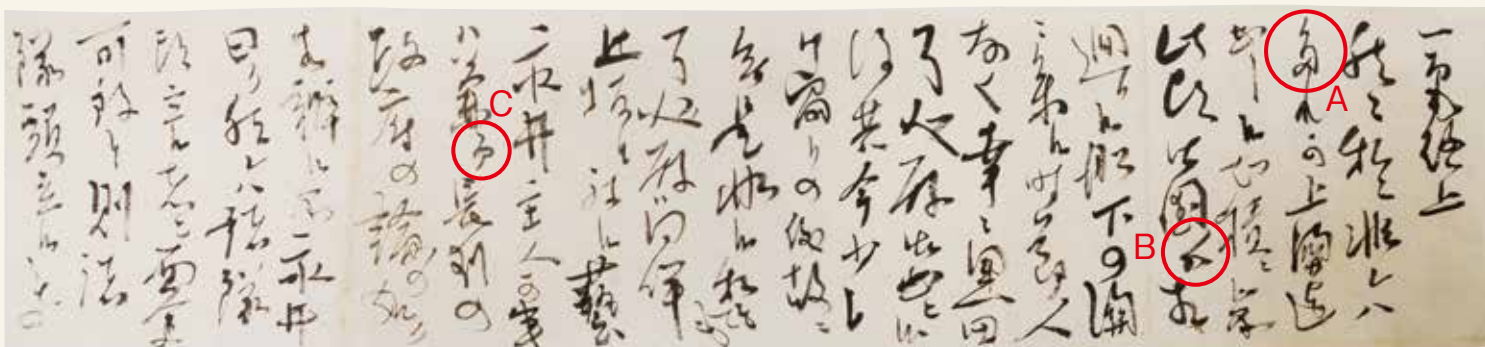
助詞の扱いの難しさ

さらに悩ましいのは助詞である。代表的なものとして「て」や「え」（現在の表記では「へ」）がある。これらも現行の漢字と仮名とも言い難い形ではあるが、どちらかといえば漢字（「而」や「江」）に近い形が書かれることが多い。では、これらの助詞は、書き手（龍馬）の意識として、漢字を書こうとしたのであろうか。仮名を書こうとしたのであろうか。それとも漢字でも仮名でもない文字を書こうとしたのであろうか。そもそも漢字・ひらがな・カタカナしか認識しない現代の我々には到底知り得ないことである。それでも、活字化にあたっては漢字か仮名のどちらかで表さなければならぬのだ。結果的に、これら助詞については、用例が特殊なこともあって、仮名とはみなさず漢字で表すのが通例だが、一般の読者にとっての読みやすさの問題を含めて、いつも悩むことである。

今では使われない文字

現代人の感覚とかけ離れすぎて、逆に踏ん切りのつくものもある。今は存在しない「夕」や「一」などの文字である。近世史料に触れたことのある方にはお馴染みだろうが、これは合字と呼ばれる種類の文字である。二つの仮名文字が合体したと解釈できる特殊な文字で、読み方としては、それぞれ「より」「コト」と読むのが正しい。フォントの充実により合字の一部は簡単に再現可能となったが、これらを違和感なく読める現代人が一体どれほどいるだろうか。

明治維新150年。我々が当たり前のように使っている文字も、150年後の人々を悩ませることになるのだろうか——そんなことに思いを馳せつつ龍馬の手紙と向き合う日々である。



改訂版で追加される手紙（慶応元年12月14日）の一節。「一筆啓上」で始まるかきこまった文体の手紙は、乙女宛などとは異なる龍馬の一面を見せる。Aは変体仮名の「た（多）」、Bは合字の「た」、Cは助詞の「而」。

■ 展示の見どころ

新館の展示は、常設展示室と企画展示室、ジョン万次郎展示室の3部屋となる。これまでとの違いは、順路に沿ってご覧いただくことで、龍馬の手紙を古い年代から順番にご覧いただくことができる点である。当たり前なことだが、これまでは展示ケースの問題から、それが出来なかった。常設展示スペースも2倍近くに広がるため、時代背景の展示も可能となる。こうした変化により、龍馬への理解がより深まることは間違いない。

また、展示室や展示ケースは、温湿度管理を徹底できる仕様になっており、安心して実物資料が展示できる。そのため、企画展は、他館から貴重な資料を借用できるようになり、充実した内容となる。

三浦 夏樹



新館完成予定図



ガラス張りの新しい図書コーナー

■ 図書コーナーの充実

図書コーナーは以前と同じ場所に、やや拡充したスペースで登場。書棚や座席も増えるため、オープンを機会に蔵書を充実させる予定である。特に、子ども向けの分かりやすい歴史の本が少なかったため、龍馬以外にも幕末や日本史に関わるまんが、伝記、図鑑などを中心に発注をすすめている。大人向けも、写真本や近年の研究結果が反映された新刊本を重点的にそろえている。残念ながら貸出はおこなわないが、子どもから大人まで、ゆっくり本を楽しめるような空間としたい。

亀尾 美香

■ 広くなったミュージアムショップ

平成30年4月、本館の出口に新しいミュージアムショップがオープンします。約一年をかけ、ショップ検討会を立ち上げ、皆で商品を検討してきました。沢山の業者さんや個人の方々からの提案があり、一つ一つ意見を出しあいながら決定するもの、残念ながら不採用になったものなどありましたが、今までにない様々な商品が揃いました。

また、検討会を重ねるうちに、自分たちの手で作り上げたものを新しいショップに並べたいという思いが強くなり、記念館オリジナル『龍馬・家紋缶バッジ』が誕生しました。書籍やグッズも皆で熟慮し、検討したものを取り揃えています。四季折々の桂浜と龍馬の”風”を感じて頂けるよう、ディスプレイにも工夫を凝らしています。

館内見学のと、お帰りの際には、是非、お立ち寄りください。

中平 文



ミュージアムショップグッズ

編集後記

12月下旬の事務所引越し作業。8か月余りのお隣、国民宿舎「桂浜荘」での仮事務所生活がもうすぐ終わる。そんな中での「飛騰」執筆と発送作業であった。いつも以上に気持ちが急ぐ気がした。

さて、新しい年を迎え、平成もあと1年数か月。多くの方が、時代のカウントダウンが始まった気分になったのでは…。本年4月21日、記念館のグランドオープンはつまり、「志国土佐・維新博」第二幕のスタートである。気持ちを引き締め、日々の一歩を進めよう。(ゆ)

館だより“飛騰”第104号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏
発行日 2018(平成30)年1月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp
高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

2018年4月21日(土) グランドオープン!

国民宿舎「桂浜荘」に移設しておりました記念館仮事務所は、昨年12月に高知県立坂本龍馬記念館の新館1階への移転を完了いたしました。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
〒781-0262 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで



政井 寛保

私のテーマ

変わる事のない龍馬像

私にとって昨年、龍馬没後150年という年は節目の年であった。なぜなら私が龍馬を知り好きになった年、1985年が偶然にも龍馬生誕150年だったからである。生誕150年という事は後で知ったことだが、その時発売されていた記念品は今も大事に持っている。

さて本題に入る。その間、様々な研究は進んできた。しかし32年前と現在の龍馬像はあまり変化していないように思われる。そこで実際に龍馬研究で変化してきた事を簡単に何例か挙げてみる。

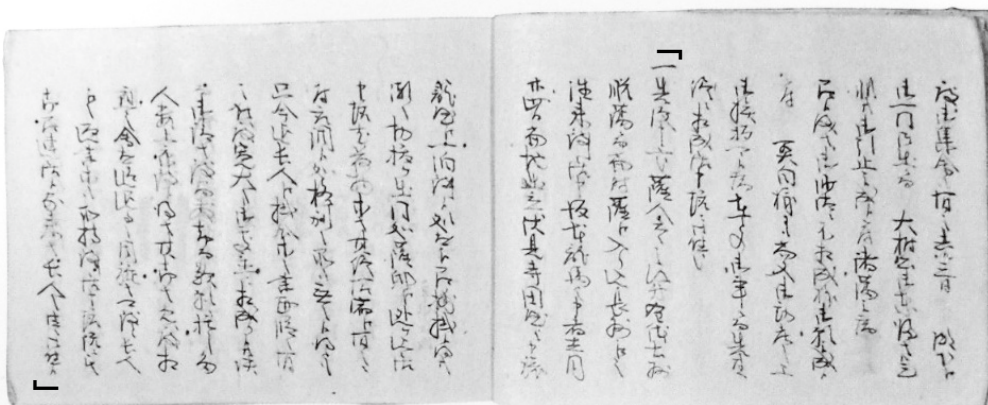
- 誕生日と命日は同じ日ではない可能性がある。
- 龍馬愚童説の否定。
- 龍馬の成長期の人間形成において姉乙女よりも継母伊与の影響が大きい。
- 薩長同盟の際、一緒に上京した長府藩士三吉慎蔵の非護衛説。
- 船中八策は実際に存在しない。
- 海援隊（亀山社中）において成功した海運業はほぼ皆無に等しい。
- 大政奉還論は龍馬の論ではなく慶応3年当時の政治社会では共通事項であった。
- 龍馬は最初から不戦平和主義者ではなく、薩長両藩と足並を揃えて土佐藩の武力挙兵を促そうとしていた武力討幕派であった。

以上、何例か挙げてはみたが、私の勉強不足もあり正確ではない事もあるので、その辺りはご了承ください。

尚、薩長同盟（盟約）に関しては軍事同盟か否か等で盛んに議論され、坂本龍馬記念館でも「再検証 薩長同盟」展が開催された程の重要なテーマである。明治維新以降の政府が薩長で固められた事実から見ても歴史的な事件であった事は間違いないだろう。その上で新発見された「京坂書通写 慶応二年丙寅正月」が今後の研究に重要な意味を持つ筈である。（宮川禎一氏の薩長同盟リーク説は非常に興味深く納得させられた。）

坂本龍馬を正確に知るのには難しい。正確に知るにはあまりにも史料が少な過ぎる。しかし今後もおそらく龍馬の関係史料が見付かる事だろう。その度に史実も変化していくと思われる。正確に史実を知って受け入れていく事も龍馬ファンとして大事な事であると思う。ただ史実だけでなく龍馬の魅力を一つである。それぞれに思い描く龍馬があるのも当然の事なのだろう。最後に私の好きな龍馬の逸話を紹介したい。「ある時、不意に高松家を訪れた龍馬は姉や高松家の人々に挨拶もせず、海

見える高松家の縁側に座り一日中、海を見ていたという。（安田村の郷士の邸はみな高台にあり、よく海が眺望できた。）龍馬は何かを考えているらしく、女中は何も語りかけることができなかつたという。夕方になると龍馬の姿はなかつた。再び挨拶



もせず、龍馬は高松家を辞していったという。」この話は高松家へ女中として奉公していた女性が目撃した龍馬についての逸話だが（出典 小美濃清明著『坂本龍馬・青春時代』土佐史談会 内川清輔氏の話より）印象に残る光景である。この逸話こそ龍馬の実像の一つであり、龍馬の可能性を表している様に思われる。私達が思い描く龍馬像に近い、そんな光景ではないだろうか。

たとえ史実がどうであれ、今後も龍馬像は変わる事なく続いていく事であろう。

「先般申上候薩人云々之次第全驛土州脱藩ニ而当時薩人入り込長州之往来致し居申坂本龍馬と申者去月廿四日当地出立伏見寺田屋と申旅籠屋一泊致し候処を被召捕掛候得共漸々切抜ケ出同処薩邸へ逃ケ込居申趣尤荷物等は其俣右宿有之ニ付取調候処格別之品ハ無之候得とも只今迄長人え掛合等之書面段々有之此度寛大之御処置ニ相成り候共決而御請は致問敷却而敷願ニ托し多人数上京候得は其節は急度相応し会を追退事之周旋は可致と長人え之返書等も所持致し居申趣既ニ其節召連居候家来は長人ニ御座候

鳥取池田家文書「京坂書通写・慶応二年丙寅正月」より
（鳥取県立博物館所蔵）

をリアルに伝えたい」

を手掛ける～ デザインディレクター 高辻 純哉 さん

高辻純哉さんはいつも軽やかに笑っているイメージがある。この笑顔とおつきあいし始めてから3年以上になった。

2014年11月に新館、本館（既存館）の展示設計担当が㈱丹青社（本社・東京）に決定した。以来、高辻さんは、チームのメンバーとともに所属の関西支店（大阪）から足繁く通って来ている。

昨秋、新館、本館とも外観はほぼ出来上がり、内装工事が始まった。それ以降、夜間でも照明が消えることはない。現場の作業が続いているためだ。

今年4月から記念館には多くの方たちが来てくださるであろう。入館者に喜んでもらえる展示をめざして取り組んで来た高辻さんに聞いた。

自由な発想を具体的な展示に

高辻さんとは、けっこう長いおつきあいにになりましたね。でも、こんな形でお話しする機会はなかったように思います。展示工事も進み、佳境に入ってきました。改めてお話を伺いたいと思います。

そうですね。今回の工事では、高知県から展示の提案公募が発表され、私たちがそれに応募することを決めてから記念館を訪ねていますから、かれこれ4年になりますかねえ。弊社への委託業務が決まった頃は33歳だったので、龍馬さんの（亡くなった）年齢と重なって、運命を感じましたよ（笑）。私たちは今回、四国エリア担当としてチームをつくりました。本



社は東京ですが、メンバーの中には高知出身者もいます。応募前にリサーチで記念館を訪ねたときには、森・前館長に会い、熱い思いをお聞きしました。

私たちは長年、リニューアルや新館建設への希望を持っていました。それが実現に向けて動き始めたときには歓声が上がったほどでした。

開放的な本館は、子どもや歴史を知らない方たちも楽しめるパフォーミングス館に。対照的に新館はどっしりとした蔵のように、ある種閉鎖的であるくらい本格的な博物館仕様にしたい。この対照的なデザインが、当初からのコンセプトでした。

まさに、森・前館長はそういったことを語られていました。特に本館は、幼稚園児がお面をつけて走り回っているイメージがあるくらい自由な発想でしたね。面白いと思いましたが、現実的には難しいところもあります。ですから、その発想をどこ

まで具体的に引き寄せることができるかということ意識しました。

それにしても、2つの建物の特長はイメージしやすかったです。静と動という対照的な建物であるという事は、展示の性格分けもはっきりしているわけです。

新館は照明の工夫で資料を強調

性格分けということは、展示も建物と同じように静と動ですか。具体的にはどういったことでしょうか。

まず、静である博物館仕様の新館ですね。常設展示室はかなり広くなりましたので、今までより多くの資料を展示します。しかし、ただ並べるだけでは展示とは言えません。

歴史資料が並ぶ新館は、暗い展示室内での装飾を省き、照明によって龍馬の手紙などを浮かび上がらせます。ディテールにはこだわりたい。資料にだけ光があたるような計画をしています。資料周辺のもの存在を

暗さの中で消すことによつて、資料そのものが見る人に語りかけてくるはずですよ。背景（空間）がもの（資料）を邪魔しないシンプルな関係です。また、説明版などのデザインも工夫します。

物量、つまり資料が多ければいいということでもありません。学芸員さんと相談しながら、展示資料を絞り込んでいくことも大事ですね。

なるほど。実際に資料を展示するのはまだ先ですが、興味深いお話ですね。

龍馬の資料は手紙が中心です。手紙といっても、現代の私たちがスラスラ読めるわけではない。龍馬の言葉をややく伝えたい。それなら展示室の外に言葉の壁をつくらうということになりました。光の中で龍馬の言



「龍馬の人生」 ～新館、本館の展示設計



実現させてください(笑)。人と人が接してコミュニケーションを図ることは大切ですからね。本館2階は、龍馬の人となりや時代を紹介する「幕末広場」です。記念館のアイデアが生かされるような設計工夫もしています。

これは高辻さんに1本取られました(笑)。とてもいいアドバイスなのでこれからのヒントにさせてもらいます。実際は私たちも一緒に展示作業に関わっているのですが、今までとどう違うのかお話しください。

本館は、今までの記念館です。ブルーとオレンジ色も鮮やかな、ガラス張りの建物ですね。

そのガラスのボックスのような建物の2階に、様々な白い箱を置く。要するに、龍馬の子ども時代から暗殺までをパーストごとに箱をつなぐように紹介しています。箱の中では各々違う世界が展開しています。

以前常設展示室だった地下2階は「幕末写真館」となり、図書コーナーを充実させるなど本館が大きく変わります。子どもたちが本館を歩くことで、龍馬が近代日本を形づくることを決定づけた人であると感じてもらいたいと思っています。

フレッシュな発想と歴史の裏打ち

内装デザインというのは、入館するお客様と直に接するところなの

で、第一にその反応を考えなくてはならない。3年前の設計当初から多くのアイデアを出していたけど、変更を重ねて改良して来ました。私たちには思いつかない発想もありましたが、アイデアに困ることはないのですか。

それはあまりないですね。大学卒業後、丹青社に入り、翌年から歴史博物館や美術館などの現場で展示設計に関わってきました。もう14年になります。

歴史であれ美術であれ、本を読んだり写真を見たりして、自分なりのイメージをつくっていきます。今回はやはり司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』を読みました。それぞれの楽しさがありますよ。自分の手がけたものが地図上に残っていくということとはうれしいですね。

旅行をしてもテーマを持ったり、見学する視点は違ってきます。最近では世界三大古戦場の1つと言われるベルギー・ワテルローに旅しました。

時空を超えた旅ですね。そういった姿勢が新しい展示をつくっていく



るのでしようね。最後に、高辻さんから見た龍馬とはどんな人でしょうか。

そうですね。龍馬は、先を見通す力を持った現実主義者だと思います。

私の高祖父は、高辻奈良造とって鐘ヶ淵紡績株式会社(鐘紡の前身)の取締役で、工学博士でした。渋沢栄一(幕臣のちに実業家)と一緒に渡米したこともあります。ふだん意識することはありませんが、高祖父や渋沢を通じた龍馬との縁を感じたりもします。

展示の完成までまだまだ気を抜けません。チームの仲間とともに皆様に喜ばれる展示づくりをしていきます。

力強いメッセージです。4月のオープン時には、入館した方たちの笑顔に囲まれたいですね。ありがとうございました。

高辻 純哉 (たかつじ・じゅんや)

1981年、京都府八幡市生まれ
京都工芸繊維大学工学部造形工学科卒

2003年株式会社丹青社入社

UCCコーヒー博物館、京都文化博物館、大津市科学館など公共施設、各企業のショールーム、イベント会場、企業ミュージアムなどの展示設計を手掛ける。

現在は、高知県立坂本龍馬記念館をはじめとする公共の博物館や企業のミュージアムで展示空間のデザインを担当。また、家具などプロダクトデザインの分野において、海外での活動にも積極的に取り組んでいる。



インタビューアー
前田 由紀枝
(まえだ・ゆきえ)

現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬
記念館学芸課長

歴史を体験する本館

では、リニューアルされる本館はどんな感じなのでしょうか。
お面をつけた子どもたちもワクワクするような展示になっていますか。

お面をつけた子どもたちですか。それは開館後に記念館が主催して親子のためのツアーや、イベントなどを通じてぜひ

葉や文字を浮かび上がらせます。

また、龍馬は日本という国の形をつくった人であることを伝えたいと思っています。つまり龍馬の足跡や大政奉還の意味など歴史的な背景は欠かせない。しかし、そういった事象の紹介というものはなかなか難しいものですけどね。

資料展示は来月以降になりますが、並び終えるまで気が抜けませんね。

「薩長同盟とは何か？」

宮川 禎一

龍馬を主人公に幕末史を見ている筆者から「薩長同盟とは何か？」という問題を書いてみたい。

慶応元年から龍馬や中岡慎太郎らが奔走して薩長和解を進めてきたが、慶応2年1月に京都で会談のち結ばれた薩摩藩と長州藩との盟約が薩長同盟と呼ばれる。薩摩は長州をどのように助け、京都の朝廷での地位を回復するのか、さらに両藩は皇威回復で致したという6箇条の約定が残る。その条文の意味がどうのこうのが薩長同盟の研究だとされる。

しかしながら最近の筆者の考えは全く別だ。薩長同盟を藩同士「契約関係」のようにとらえるのは間違っていると思う。薩摩藩というモテモテの女性が幕府と長州藩という老若男性2人から同時に言い寄られている状態を脱して、幕府に「めんなさいをして長州藩と結婚したようなものだ。下世話すぎる喻えだがこれが一番しっくりする。「薩長はデキてる」という関係を周囲の人、すなわち幕府や諸藩がどう見たのかというところの方にこそこの同盟の本質はあるのだ。慶応2年夏の第二次長州征伐に際し、長州藩のうしろに薩摩藩がいるという状況自体が（薩摩藩が兵を出して助けなくても）長州藩

の大きな防衛力となったのだ。

結婚は契約書ではなくお互いの信頼によつて成り立つようなもので、年に2回の海外旅行や離婚の際には財産の8割をよこせが結婚の本質ではないのと同じだ。明治から昭和の前半までも薩長同盟に大きな意味があつたことを考えると契約を超えた男女の仲のようなものが、ここにあつたはずである。

ここが文書第一主義の歴史研究の理解の及ばない部分である。いがみあつていたとされる薩摩藩と長州藩（性格もずいぶん違う）とがなんだかんだ半世紀以上もつれそつていた本当の理由は慶応2年1月に京都で結ばれた「6箇条の約定」を、読んでも理解できないように思う。薩長は奥深い関係だ。ここに解明すべき歴史の要点があるのである。



慶応2年1月に薩長交渉が行われた京都の小松帯刀御居跡石碑

コラム・龍馬のこと

「池道之助の記録から」

鈴木 典子

幕末、土佐藩の運舟買付けのため、通訳者の命を受けた中濱万次郎に勤められ、共に長崎に旅をした池道之助。長崎での出来事を日記に残しているのであるが、その記録の中に坂本龍馬と亀山社中のことが記されている。

「慶応二年四月十九日天気 今日宇和島いろは丸借り舟船頭市太郎九時出帆 見送り

二十九日天気 今夜市太郎大坂より帰る 十ヶ日になる 浪人舟いろは丸借り受大坂へ行ける所三州箱の三崎において紀州舟に乗りかけられ いろは丸ついに沈み市太郎助かる侍宿坂本龍馬などは後より早船にて追々来る由 実に不安である」

この後、紀州藩との対談の記録に龍馬の別名才谷梅太郎の名でその様子が記されている。

「十五日くもり 才谷梅太郎今日紀州へ対談に行く 森田晋三 浪人者四五十人余り 小そねへ集まる

五月二十二日天気 後藤様 横山 私 常作 才谷梅太郎 尾小谷孝蔵四五人連れにて聖福寺へ行き紀州藩と談判いたす」

このような交渉が何度も行われた後、その年の「十一月十二日紀州より金子八万両持って来られ受取る」と記されている。正に龍馬が暗殺される3日前のことである。今日ならば電話ですぐに龍馬との連絡ができるのであるが、当時は飛脚にたよるしかなかった時代である。龍馬は入金のことすら知らず、喜ぶ顔を土佐藩も見ることなく、龍馬はこの世を去ったのであります。

“話してみるかよ”

「龍馬さんと私の孫たち」

藤長 一美

私には3人の孫がいます。その孫たちと、龍馬さんとの繋がりをを感じるエピソードがあるので、お話したいと思います。

私がかねてから、男の子の孫が生まれたら「龍馬」と名付けたいと思っていました。3年前に初孫が誕生しましたが、女の子だったので、「龍馬」と名付けることができませんでした。数ある名前の候補の中から、皆の意見が一致して選んだ名前は「夏緒」（かお）という名前でした。夏に生まれ、母親の名前から1字取り、この名前になったのですが、あの平井加尾さんを思い出して、龍馬さんとの縁を感じました。

そして今年、2人目の孫が誕生しました。次も女の子でした。この子には、娘夫婦が「紗南」（さな）と名付けました。偶然にも、また龍馬さんと繋がりのある女性と同じ名前ということで、不思議な気持ちになりました。

5月には3人目の孫が生まれ、初めての男の子でした。「龍馬」という名前を1番に考えていたのですが、いざとなると何だか恐れ多くて、名付けることが出来ませんでした。

この子には、生まれたのが初夏の頃だったということもあり、「夏向」（かなた）と名付けられました。ところが、この子にも、龍馬さんとの繋がりをを感じるエピソードがあるので。なんと、誕生日が5月27日。それは、桂浜にある龍馬像の除幕式が行われた日と同じ日だったので。

今、こんな3人の孫に囲まれて、私は幸せに暮らしています。夏緒と紗南には、将来龍馬さんのような素敵なお父さんと巡りあって欲しいと思っています。そして夏向には、龍馬さんのように志をもって、それを成し遂げようと努力する人になって欲しいと願っています。

また、孫たちを連れて高知へ行きたいです。